

共同研究 ● 贈与論再考——「贈与」・「交換」・「分配」に関する学際的比較研究（2012-2014）

共同研究「贈与論再考」の目的は、M. モース著『贈与論』を出発点としつつ、世界各地における贈与や交換、分配についての事例を比較検討することによって、人類にとってモノの贈与や交換、分配がいかなる意味や重要性を持っているかを解明することである。

M. モース (Mauss) は、ポトラッチを典型とする義務的贈答制は、程度や形態には違いがあるものの北アメリカ北西海岸先住民社会やトロブリアンド諸島民社会など、さまざまな社会に存在していると指摘している。そして各地のポトラッチ現象を比較検討し、いくつかの重要な指摘をしている。本共同研究と関連させると次のように整理できる。(命題1) 多くの人類社会には互酬的な贈答(贈与と返礼)が存在し、その大半は義務的贈答制である。それは、贈る義務、受け取る義務、そして返礼する義務からなる制度である。(命題2) その義務的贈答制は、経済的特性のみに還元できない社会的、政治的、宗教的、法律的、道徳的、審美的意義を持つ全体的給付組織(もしくは全体的社会現象)である。

2013年3月3日開催の共同研究会では北アメリカ地域(カナダ・バンクーバー島のクワクワカワク社会とアラスカのグイッチン社会)におけるポトラッチや分配について検討した。本稿では、立川陽仁(三重大学)と井上敏昭(国際城西大学)による北アメリカ先住民のポトラッチや分配の報告を基に贈与に関して判明したことを整理した後、仮説と今後の課題を提案する。

北アメリカ北西海岸先住民クワクワカワクのポトラッチ

森林資源と水産資源に恵まれた北アメリカ北西海岸地域の先住民は、狩猟・漁撈・採集民であるにもかかわらず、高い定住度、階層化、複雑に発達した儀礼を持つ社会を形成してきた。人類学的には、彼らは巨大なトーテムポールを作り、盛大なポトラッチ儀礼を行なうことで知られている。

1890年代前後のフランツ・ボアズ (Franz Boas) らによる調査から、北アメリカ北西海岸先住民クワクワカワクのポトラッチは、出生祝いや成人式、結婚式、地位の継承式、葬式の際に開催される莫大な財の贈与や消費を伴う競争的かつ異常な儀礼であるとされてきた。たとえば、あるクランの首長の継承式で別のクランの首長たちを招待し、ポトラッチを開催した場合、その後、招待された首長は招待した首長を招き返し、返礼として盛大な饗宴と利子を付けて財の贈与を行なうとされていた。このため、この招き、招かれるポトラッチは義務的なもので、時間の経過とともに繰り返され、過激な贈与と競争のようになる。この見解では、一方的に財が贈与されるポトラッチが当事者(クラン)間で繰り返されると、長期的に見ると、それは2つの首長(クラン)の間での財を交換する形態になる。ボアズは、このようなポトラッチの実践を「利子を生み出す将来への投資」と解釈した。

その後、ボアズの弟子たちは、ボアズがポトラッチを調査した時代的脈絡を考慮し、ポトラッチは「異常な」実践ではなく、「理解可能な」実践であることを解明しようと試みた。

すなわち欧米人との接触が引き起こした伝染病による先住民の人口減少など歴史的な社会状況や、カナダ政府によるポトラッチの禁止(19世紀後半から20世紀半ばまで)などの政治的状況を考慮に入れて分析し、修正点を指摘してきた。ポトラッチの研究史を丹念に整理した立川陽仁は、(1) 主催者に賛同しない者は招かれても参加しない点、また、招かれて参加してもその人物が存命中に必ず招き返すことが確認できない点、(2) 招待者と招待された者の間では、ポトラッチは利潤を生み出す、返済が期待されるやり取りではない点、(3) ポトラッチにおける財の



北西海岸先住民ハイダのポトラッチ (2006年8月、カナダ国ブリティッシュコロンビア州クイーンシャーロット島マセット)。

異常な贈与や破壊は、人口減少によって社会の再編成を余儀なくされた社会の序列を新たに確定するための一時的な現象であった点、(4) ポトラッチは寛大さを売りにした「ふつうの」贈与である点を明らかにした。

現在のクワクワカワクウのポトラッチは、ボアズが調査した時代と比べ、クラン全体というよりも首長個人が饗宴と贈物を準備し、実施する形態へと大きく変容してきた。現代のポトラッチには、主催者の社会的認知や、主催者と招待者との社会関係の再確認などの効果があるものの、クラン間での競争性や序列化といった側面はほとんど見られなくなっている。



アラスカ先住民イヌピアットの使者祭の時のドラムダンス。プレゼントの贈与や交換が行なわれる(2013年2月、米国アラスカ州パロー村)。

アラスカ先住民グイッチンの分配(シェアリング)とポトラッチ

アラスカ内陸部の狩猟・漁撈・採集を生業とするグイッチン社会では、カントリー・フードの分配やポトラッチが行われてきた。

グイッチン社会では、地元で捕獲されるカリブーやサケなどを、店舗で購入できる外来食品とは区別し、「リアル・フード」と呼び、「分け合うべきもの」とし、現金による売買を禁止している。この分配では、即時のお返しは忌避され、もらった人はさらに分配し、その繰り返しの結果として社会内に広く行きわたる。彼らは、分配するのは「そうすべきだから」、「祖先がずっとしてきたから」、「そうするのが我々だから」と説明する。井上敏昭は、このシェアリングによって、彼らは当事者間の社会関係を確認し、維持するとともに、仲間同志や祖先とのつながりを実感し、アイデンティティの源泉になっていると主張する。

グイッチン社会には、北アメリカ北西海岸先住民と共通した属性を持つポトラッチが存在してきた。同社会はかつて3つのクランから構成されており、新年や死者追悼の機会、不猟年にヘラジカ猟が成功した時などに、主催者が他のクランの重要人物を主賓として招き、参加者の前で財の贈与や破壊を行なった。一方、財をもらった人物のクランはもらい手に甘んじているのを屈辱とし、返礼を企てた。かつてのポトラッチには、一方的な贈与による主催者クランの経済的優位性、および招待したクランとの潜在的な敵対関係を表明すること、一般参加者がポトラッチを社会的に評価することなどの特徴が認められた。このポトラッチは、1970年代の定住化に伴い、ヨーロッパ系アメリカ人との政治経済的な関係が深くなるにつれて変容していった。現在、ポトラッチと称される儀礼は、人びとが集まる時に開催される「フィースト」と伝統的なポトラッチを形式的に踏襲した「ギブアウェイポトラッチ」の2つである。

フィーストは、政治集会やクリスマスから新年にかけて先住民政府等が主催する行事の時に、行なわれる。フィーストの主催者やボランティアの人びとは、参加者のために「リアル・フード」と労働力を提供する。参加者は料理を持ち帰り、さらに二次分配を行なう。井上は、このフィーストは主流派社会の貨幣経済的社会様式とは異なる、グイッチンの生き方が可視化され、確認される、大がかりな儀礼化された

シェアリングであると解釈している。一方、ギブアウェイポトラッチは、葬式などを手伝ってもらった人が、近親者の援助を受けて準備し、恩人を主賓として招き開催する。主催者は主賓や参加者に贈物をする。このポトラッチは、グイッチンらしさを自らが確認する場として機能している。これらのポトラッチは主催者から参加者への「リアル・フード」の分配・再分配が根幹にある。井上は、ポトラッチの力点がかつてはクランの対立から現在は社会の協調性や分配の可視化へと変化している点に着目し、それは独自の文化が持続していることを確認し、内外に表明する場となっていると主張している。

成果と今後の課題

モースは、ボアズらの報告した北アメリカ北西海岸先住民のポトラッチを事例に贈与論を展開した。本共同研究では、クワクワカワクウ社会やグイッチン社会の昔と現在のポトラッチや分配を事例に、冒頭に示したモースの命題を検討し次のことを明らかにした。(1) 上記のポトラッチは、主催者から招待者や参加者への一方的な贈与である可能性が高い。ポトラッチや分配には贈る義務は認められるが、受け取る義務や返礼する義務は必ずしも認められない。(2) 上記のポトラッチや分配の意義は、経済的な特性のみに還元することはできず、社会的、政治的な効果が認められる。このため、これらのポトラッチや分配はモースが指摘するように全体的社会現象である可能性が高い。

以上が、これまでの共同研究の成果である。今後、モースの贈与論に由来する知見を比較のために参照しながら、オセアニアやアフリカ、ユーラシアなど世界各地のさまざまな事例を検証し、贈与や分配とは何かをさらに追求していきたい。

きしがみのぶひろ

国立民族学博物館研究戦略センター教授。専門は文化人類学、極北先住民研究。アラスカ・イヌピアットやカナダイヌイットの文化や社会変化、食物分配を研究している。編著書に『捕鯨の文化人類学』(成山堂書店 2012年)や『開発と先住民』(明石書店 2009年)、*Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84 国立民族学博物館 2013) などがある。